

篇(約論)に於いてこの概論の結論を行ひつゝ、來るべき第二部、即ちフリードリヒ史學を中心とする特論への道を指示される。

この浩瀚なる大著、極めて特色ある博士の文體を前にしては、淺學菲方の筆者としては、全く目次の紹介しかなし得ない愚を恥ずるのみである、この點著者並に讀者に對して心から深謝せねばならない。にも拘らず、厚顔にも紹介の頁を汚す所以のものは、全く、著者の高潔な學者的良心とその成果とを、遍く世に公にせんとの微意より出たものである。聞く所によれば、本書第二部の原稿は被災のため灰燼に歸した由、誠に遺憾にたへない。然し、博士の熱烈なる學問的情熱が、恐らく、日ならずして、不死のミネルヴの如く、灰燼の中より再生せしめられるであらうことを期待するのは、筆者のみではないであらう。(昭和二十年二月、三省堂 定價拾八圓)。(前川貞次郎)

日本群島

小川 琢治著

今や日本は未曾有の戦敗の悲惨さの中に喘ぎ敗戦の痛苦をしみてと味つてゐる。しかしながら、顧るならば我には敗るべくして敗れたのである。そして敗戦の原因にも種々なものが数へられてゐるが一言にして之を云へば、矢張り彼を知らず、己を知らなかつた事に落着くであらう。果して然らば、皇國再建のためには廣く外に通じ、深く内に省みなけをばならない。われ／＼地理學專攻の徒にしても新しい眼を以て遍く諸國の、又日本の地理を見直す必要があるのではなからうか。かかる意味に於て私は本書

を繙く機會を與へられた事を衷心喜ぶものである。

本書は故小川琢治博士の遺稿集とでも云ふべく、三部から成り立つてゐる。第一部は總論で、序説と地理的位置、近海、領土、海岸、地勢の五章に分たれるが、之は博士が昭和二、三年の頃に發刊を企てられた地理學叢書の第一卷『日本群島』として執筆されたものの草稿で、本來は他に氣候、生物、住民、交通、産業、都邑を加へて完結される筈のものでつた由である。今息茂樹氏の序に依れば、この地理學叢書は當時の世界情勢に對應すべく「世界に於ける帝國の位置について正確な地理的知識を國民に與へ、その上に國家百年の長計を樹立されんことを念願」されたものであつて、日本の地理的長所と共に短所を或は英國と比較對照し、或は歴史に照合して大局から平易に説明されて居り、今更に示唆される所が尠くない。第二部は方志であつて、十一章に區分された地域と結論とからなり、實質的には先の『日本群島』の續編と見られる、昭和四年秋より刊行された新光社の『日本地理風俗大系』への寄稿を主として居り、云はば我が國地誌の通俗化に目的があると云へよう。然し乍ら、文字通り博士の専門中の専門事項についての執筆なる故、本書中で平易なうちにも最も讀みごたへのある部門で、就中、戰爭地理學、刀劍地理學上からの觀察敘述は全く興味深いものがある。惜むらくは寄稿論文の集成といふ性質上、地誌が各地域によつて項目を異にし今一つ網羅統一されてゐない憾みがあり、又樺太、臺灣、朝鮮の各章に讀み及んでほうたた感慨深きものを覺える。第三部は日本群島と題され、之は明治四十三年

日本歴史地理學會に於ける講演の遠記で、附録の形として收められてゐる。第一部の完成された日本群島論の基盤をわれ／＼はこに見出し得るのである。

之を要するに、本書は中絶した草稿や、項目を異にした寄稿論文の集成等を以て夫々各部が形作られてゐる關係上、全體として種々物足りない感じを受け、又他面我が國が不幸にも明治維新前の國土に縮小されて、ために現在では妥當しない個所の散見するのは残念ではあるが、然しそれ等は勿論本書の價值を損ひ減するものではない。博士の先覺者としての炯眼は昭和の初年既によく我が日本の世界に於ける地理的姿相を確固と把握し、帝國內、各地方の特殊性を巧妙に指示してゐられるのであり、十數年を経過してなほ光彩を放つてゐるのである。憤しくも身邊の反省が要請され、祖國への凝視が必要な今日、地理的知識の大衆化を目論まれた博士の意圖のまに／＼廣く本書の閲讀されん事を祈つて止まない。(昭和十九年九月、弘文堂書房刊、A5版、三七二頁、賣價七圓參拾五錢)(岡本信太郎)

J. G. Andersson; Researches into the Prehistory of the Chinese. (Stockholm, 1943)

一九二〇年代の前半に行はれた瑞典アンダーソン教授の支那史前遺跡の學術發掘が東亞考古學發達の上に劃期的なものとして、爾後の自覺しい支那史前文物の研究に學術上の基準を與へたことは著名な事實である。右の調査の結果に就いては當時『中華遠古

之文化』『甘肅考古記』などの略報告が相次いで公にせられ、更に一般向に書かれた *Children of the Yellow Earth* (London, 1934) なる概觀書なども世に出て、その後者は『黃土地帶』なる書名の邦譯が現はれて廣く世に知られてゐる。供し以上の刊行物は孰れも云はゞ豫報的な性質を出でないものであるので、調査の示す重要性の上から調査者が公約してゐるより、詳細な事實の記載を主とする報告書の公刊が學界からは期待された次第である。然るに支那事變以後の世界の動きはその實現に支障を來し、その間アンダーソン教授の隱退の事などあつて二十年の歲月を経過した間に僅かにアルネ、ベームグレン兩氏の手になる出版物を見たのみで當の教授の報告に接し得なかつたのは吾々の深く憾とした所である。されば教授の後を繼いだカールグレン教授の配慮に依つて、瑞典東洋美術博物館紀要の第十五冊として纏に表題の書の公刊を見るに至つたのは、右の點からまことに欣ばしい次第である。

この書はB5版本文三百頁に多數の挿圖を載せ、更に後半に二百頁の鮮明な圖版を添へると云ふ豊富な内容のものであつて、一見直ちに從來の遺憾をいやし、教授調査の重要性を今更ながら強く意識せしめるものがある。但し教授自身が表明してゐる如く、これも實は本格的な研究報告ではなくて、一應の中間報告とも云はる可きであり、引いて文中の所々に見える一々の一層詳しいそのの公刊が改めて待望されるわけである。併し前年ストックホルムの滞在中出土品のすべてを通觀すると云ふ稀な幸を持ち得た紹介者の所見からすると、この冊所收の圖版には教授の得た主要な